
トリニティ 改訂版

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリニティ 改訂版

【Nコード】

N7609Y

【作者名】

K | S a y u t o

【あらすじ】

時は現代。しかしここではない何処かの異世界。その世界、『ウィザードリィ』に生まれた一人の女の子。名を巫かんなぎさや紗と言う。しかしその心はこの世界でできたものと違っていた、何故なら異世界からの転成者だったからだ。

元の世界『地球』で平凡に暮らしていた女子高生、水木みずき 加代子かよこは死後に巫 紗という名の女の子になりそれまでの記憶を失い・・・、そして一体神の意図とは？

トリニティの改訂版です。ストーリーの追加&変更の他にキャラの性格などが微妙に変わったりしています。

ちなみに、World of Fantasy 改訂版の続編でもあります。

戦闘描写が初心者以下に下手ですがご了承ください。

プロローグ く始まりの一步く

部屋の片隅でキャリーバックに荷物を詰める女性。その女性を影から見つめる女の子。女の子の方から口を開く。

「おねえちゃん、本当に行っちゃうの？」

「あーもつつ、煩わづいな。たったの2日だから我慢しなさい」

「で、でも」

そう言つて女の子は女性の腕にすがりつくが。

「鬱陶うつろしい」

そう言つて腕を振り払い、よろめいた女の子は後ろにあった女の子よりも少し大きい机にぶつかりその上にあつた壺が女の子の肩に当たり、床に落ちて割れる。

「ああつ、なにやってんの。もう大切なお母さんの遺品なのに。
明日葉あすはの事なんかもう知らない」

そう言つて女性は女の子の肩から血が出ているのを気がつかないふりをしてキャリーバックを持って出て行く。

暫くひまじ、歩いて行くが。

「あー、財布忘れた。銀行よって行こう」

と銀行への道へ足を踏み出した。その一歩は全ての始まりであった。

突然の死

相変わらずと言っていいほど銀行は静かであった。

「あー、いくら引き出そうかしら」

そう悩んでいると、数名の男達が銀行に入ってきた。

（おつ、こういう場合って大抵銀行強盗とかだったりするのよね。
あくまで、映画とかの話だけだ）

そんな事を考えていると。

「動くなあ、全員伏せろっ」

「おい、お前。そこのお前だはやくこの鞆かばんにありったけの金詰め
ろ」

5、6人の男達が銃を構えて言う。

（嘘、まさか本当に遭遇するなんて・・・でも、伏せていれば
大丈夫だよな）

そう考えていると少し前にいた女の人がかつそり携帯をいじっている、その画面には『110』と出ていた。だがその女の方は気がどう動転していて忘れていたのだろう、その携帯は古いタイプで発信音が少し大きい事に。

トゥルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル、パアアアアン

ツツツ。

最後の着信音は一つの銃声で掻き消された。そして先ほどの女性の腹部あたりから赤いものがしみている。

「嘘・・・」

私はそうつぶやいてしまっていた。

「おかあーさん、おかあーさん」

女の人の娘だろうか、女の人をゆすりながら泣きじゃくっていた。

「うつせーぞ、てめえ」

男の一人が女の子に銃を構える、私は無意識のうちに飛び込んで男と女の子の間に入った。

パアンツツ

その音がして腹部に鋭い痛みを憶えた。よくみると、先ほどの女性と同じような赤いものが服にしみていた。

（私、ここで死ぬ・・・のかなあ？）

しかし思っていたよりも完全に意識が無くなるのは遅かった。

（まだだ・・・、まだ、時間は残ってるっ！）

私は感じた事のない痛みを耐えながら男に飛びかかるそれが合図

だったかのように他にも立ち上がる人たちの姿が見える。その人たちは一様に男に飛びかかり抑える。

ようやく警察が来た、そこで安心したのか、私の意識は無くなった。

その事件は翌日大きく報道された。

「女の子を庇^{かは}い撃たれるも、犯人を取り押さえた女性―

そう新聞には大きく書かれていた、そしてその勇敢^{ゆうかん}な女性は死んでしまった事も。

その新聞を見たある女の子は泣き続けていた。

転成

「――っ、ここは？」

そこはなにもないただ真っ白な世界が広がる世界だった。

（こんな場所があったなんて。いや違う、私は死んじゃったんだ多分。そっか、ここは天国だ）

「あーあー、人間の命ってこんなあつけないものだったんだなあ」

「その通りだ、しかも人間どもは常に争い、殺しを続けるのだ」

突然の声に驚いた私は体を起こす。そこには白い羽根を生やし頭には輪つかのあるシヨタがいた。

「あなた、誰？」

そう聞くと天使は僅かに上を向き。

「我は、シヨタコンのために存在する天」

そこですかさず。

「嘘だっ！」

と私は叫ぶ。

「ふむう、なかなか観察力のある女子おなこじゃのお、我の真の名はラ

テリィー・ヘイズ・ブラデリーじゃ、呼び方はヘイズで良い」

「それじゃあ、ヘイズさんここは何処なんですか？」

ヘイズさんは少し考えた後に口を開く。

「この名は、縦横の渡し橋とも言われるし魂の始終の間とも言われるが名前は特に決まっとらん」

「そうですか、そう言えばこれって転成フラグですか？」

「うむ、よく言われるのお」

私は少し考えてから口を開く。

「あのー、チートな力がありますか？逆ハーレムですか？」

「ん、なんのことじゃ？」

ヘイズさんはわからないようだったので、この話を誤魔化した。

「あの、これから行く世界はどんな世界なんですか？」

そう聞くとヘイズさんに途端に途端に私の頭を鷲掴みにする。そして私の体には一切の力が入らなく膝から崩れ落ちるが掴む力が大きくほぼそのままの態勢だった。

（意識、が・・・なく、な・・・って、いく）

そして、ヘイズさんが口を開く。

「その事に関して必要はあるまい、お主の記憶をこれから破壊し、そして別世界で生まれ変わるのだから」

「！」

それを最後に私は深い眠りに落とされるような感覚を味わった。それはとても暖かった。

最後に、ヘイズさんは口を開いた。

「最後に一つだけお願いがあります。どうかこ……いを……くだ・い」

そして私の意識はそこで完全に途絶えた。

世界の説明

この小説の舞台は「ウィザードリィ」という名で「地球」と同じ時間を進む別の世界です。

この世界にはいわゆる魔法という物があり、この世界の人は3つまで魔法を使う事ができます。初めは1つも使えませんが5歳の誕生日に覚醒し、初めての魔法を習得しその後は本人の精神の成長により全ての魔法を習得するまで、つまりあと2回覚醒します。

この世界にはエンチャントジェムという物があり基本的には宝石が埋め込まれたアクセサリーの形をしています。力が開放した時に本来の姿（武具や道具）に戻ります。ランクもあり高ければ高いほど能力も強くなります。中には守護獣（使い魔）を宿すものもあります。

さらにエンチャントジェムには呪われしジェム、”カーズジェム”と言う種類があります。エンチャントジェムと一っだけ違う事があり、カーズジェムは所持者の心を喰らい、最後には所持者の心に乗っ取ります。乗っ取られたら最後解く方法は現在見つかっていません。

運命の出会い

《明日葉編》

「えつぐ、ひつぐ。おねえ、ちゃん」

葬儀場でなく一人の女の子、名は明日葉。加代子の妹だ。

「どうして、どうして死んじゃったの」

私は問う、けれども答えてくれる人はいない。この葬儀場そつぎばにいるのは私一人だけであった。

明日葉は如何いかに加代子に嫌われていてもそれ以上に佳代子の事が好きであった。姉妹としてではない、一人の人間として。

火葬かそう、埋葬まいそうとやっていく。お通夜は昨日にやりその時は姉の友人がきてくれていたが、今日の葬式にはきてくれず、私と叔父と叔母だけの寂しい葬式であった。

その帰り道、叔父と叔母にうちで暮らさないか？と言われたが私は姉と暮らした家を出る気にはなれなかった。ひとまずは断っておいたが、淋しくなったらいつでもおいでと言われお礼だけを言っ私に家に向かって行った。

家まで後少しというところで、道の中央あたりに何か黒いものが浮いていた。私はそれに触れてみると奥に通じているようだったのでそのまま全身を入れてみた。

「ここは、どこ？」

そこは真白な世界が永遠と広がる空間だった。その空間上の私の視線の先には黒い杖が浮いていた。その杖の先には一つの大体半径10cm位の大きな宝石、名を確か『オニキス』と言ったろうか？そんな事を考えながら杖に向かって手を延ばし指先が杖に触れた瞬間に杖からは無数の光が出現し私の中に吸い込まれていく。私は驚いて目を閉じるが、またすぐに開いた。すると先ほどまでどこにもいなかった黒猫が目の前にいたのだ。

「おめえが今回のマスターかにや？」

その猫は急にしゃべり始めた。

「ねねねね、猫がしゃべったああああ」

「猫言うやな主人、^{マスター}わいにはれっきとしたオニキス・T・クロノスつちゅう名前があるんだにや」

「あ、はい。えっとクロノスさん、でいいのかな？」

「おみやわいの主人なんやからさんなんていらん、気軽に愛称でもつけくれにや」

「じゃあ、クロノ君？」

私は早速決めた名前で読んだ。

「なんね、主人？」

「えっと、主人つてのもやめてくれないかなあ？」

「むー、そんなら明日葉でええんか？」

「うん」

私は少し大きな声で答えた。

「よっし、明日葉ほんなら早速本題に入るか」

本題・・・、つまり私がここにきてしまった理由だろう。

「明日葉のねえちゃんを探しに行くぞ」

「えっ!？」

私は少しの間思考が停止していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7609y/>

トリニティ 改訂版

2011年11月24日22時47分発行